

## The Absolute Sound

JANUARY 2021 / ISSUE 312

### THE CUTTING EDGE

#### TechDAS Air Force Zero Turntable : written by Jacob Heilbrunn

Ne Plus Ultra (ラテン語で極限, 極致の意、英語 no more beyond)

おごれるものは久しからずの言葉通り、去年の春私は見事に転落した。サンタモニカにあるハイエンドストア The Audio Salon で2晩連続でTechDAS Air Force Zeroの特別発表会が行われた。TechDASの新しいフラッグシップのデビューに立ち合った私は、正直言ってデモが始まるまで非常に思いあがっていた。それまで何十年も多くの優れたターンテーブルを聴いていたがその中で称賛するものはいろいろあれど、私が10年以上前に買った Continuum Caliburn をはるかに超えるものは一台もなかった。ベルトドライブの AF Zero のほうが優れているとは思えなかった。今までと違うのは確かで外観は印象的だったが、しかし音が大幅によくなっているとは思っていなかった。だから TechDAS の CEO で設計者の Hideaki Nishikawa が選んだレコードに最初にスタイラスを落としたとき、私は Wilson WAMM Master Chronosonic スピーカー/サブウーファーから出る音にかなり懐疑的だった。

私はなんと間違っていたことか！モーツァルトの交響曲が何小節か流れたとき私の眉がぴくぴくし始めた。まもなく私の右足は神経質に揺れていた。しかし私をほとんど屈服させたのは復刻盤のルイアームストロングの歌だった。彼の声があればほどしゃがれて、トランペットがあればほど艶やかに聞こえたのは初めてだった。イメージの安定性、ダイナミクス等々、オーディオファイルのチェックボックスは全てクリアした、それと同時にそれをはるかに凌駕した、心奪われる本物の興奮が生まれた。簡単に言えば、これは単なる音のパリンプセスト(歴史を残すもの)以上のものだった。まるでタイムマシンが一瞬のうちに私を過去に移動させて、心のままに演奏するサッチモをうっとり眺めているかのようなようだった。翌日私は TAS (The Absolute Sound) の仲間 Neil Gader に電話して、絶対に聴くべきだと言った、いや正しくは要求した。

この素晴らしいレコード再生を聴いて私は熱狂させられただけでなく、自宅でこの機器を聴くことを決心した。その約半年後に東京から大きな箱が私の玄関に到着した。地下のリスニングルームに運び込むだけで屈強な人の手が何人も必要だった。何週間かすると Zero の設置を数日間行うため Nishikawa がチームメンバー数人とともにワシントンに降り立った。サンタモニカで Zero が出したような音。あんなことがいったいどうやって私の自宅で実現するのかと思わずにはいられなかった。

サンタモニカで経験した幽体離脱体験とともに、Zeroの技術的優秀性は吉兆である。TechDASは全部で40台のZeroを作る予定である。ほぼ800ポンドのターンテーブルの心臓部には、ジュラルミン、ステンレス、ガンメタル、タングステンの層からなる巨大なコンジットプラッターがある。各層にはエアチャンバーがあり高度なバキュームシステムによって一つのプラッターのように一体化される。これらの異素材の合金を組み合わせることで振動を究極に除去するというアイデアだ。プラッターはさらにエアベアリングで浮上する。これはTechDAS製のターンテーブルでよい効果を実現するため使用しているアプローチである。(TASの熱心な読者は私が高評価を与えた同社のAF3のレビューを思い出すだろう。)プラッターは250ポンドで、すごいイナーシャとフライホイール効果だ!もともとStuderのテープマシンに使われていたPapstシンクロナスマーターを改良してこのプラッターを駆動している。優れた回転安定性を実現するため、この3相モーターは3個の150Wアンプを装備している。水晶発振器、センサー、マイクロプロセッサを使って起動時にプラッターは33.3または45rpmにロックし、そこから逸脱しない。私の経験では、一度も逸脱は起こらなかった。常にグリーンの“LOCK”を示していた。さらに別のバキュームシステムはLPをプラッターに吸着するため使われる。Zeroは全部で3個の外部筐体がある。コントロール部は本体のフロントにあるパネルに埋め込まれている。ディスプレイもそこにあり、プラッタースピード、4つのエアサスペンションタワーの状態を示す最初のアラートを表示し、何か問題があればすぐに見られる。残念ながら、ラックはZeroに付属していない。ずっしりと重いZero用VXRラックを作ったHRSのMike Latvisに連絡するのといいたろう。デザインは素晴らしい。メインフレームから少し広がった4つのポッドがありスペースをとらない、また下に2枚のプラットフォームもある。ポッド自体は振動をフィルターしないが、直接地面に連結している。これによってTechDASのエアサスペンションが最適に機能できる。

最適に機能する?それ以上だ。私のリスニングルームにある機器以上だった。こんな美女と野獣の組み合わせにアプローチするのに少し用心するのは当然と言えるだろう。価格はわずかとは言えない。私が持っているのはアップグレードしたタングステンプラッターがトップについてバージョンで\$500,000である。このような素晴らしい機器には期待は常に高まるが、設計者でさえ自分の愛する傑作を自分の未知のシステムに入れるとどうなるかはわからない。私はZeroにチタンベース(タングステンにアップグレードも可能)を使って2本のトーンアームを取り付けた。Zeroはまたスタビライザーがついてくる。これはタングステンで特注も可能だ(言いにくいのだが、より高価なタングステンの方が音がよくなると思う)。

Zero の右側には SAT CF1-09 に Lyra Atlas SL カートリッジをつけた。左側は 12 インチ Graham Elite トーンアームにリファレンス TechDAS TDC01 Ti カートリッジをつけて、2 つを交互に聴いた。前者は輝きとダイナミクスがめっちゃくちゃ素晴らしく、後者は温かみのある豊かな音になる。私は Atlas に Ypsilon VPS100 フォノステージを使って TechDAS には CH Precision P1 フォノステージと X1 外部電源を使った。

Lyra Atlas での最初のリスニングで 1962 年 Moodsvill プレス盤の The Soulful Moods of Gene Ammons をかけると、サウンドに思わず呆然とした。これは単に低音がより深い（それもそうなのだが）とかディテイルがより豊か（これもその通りなのだが）とかいう問題ではないと理解するのにわずか数分しかかからなかった。全体的な音の表現が根本的に、はるかに良く変わっていたのだ。曲全体に広がるのは壮麗な安らぎ、荘厳な静謐さだ。Ammons のサックスの解像度ははるかに高まっただけでなく、音溝から引き出される音楽が穏やかでありながら決して飽きさせない。Good Gracious! という Lou Donaldson による Blue Note 録音でも全く同じだった。本当に Good Gracious だ（大変だ！の意）。The Holy Ghost での彼のアルトサックスは私が聞いたこともないような哀愁を帯びていた。より豊かで、丸みのある甘い音になったためとも考えられる。次にドイツ Gramophone LP の Karl Bohem 指揮ウィーンフィルハーモニーのヨハンシュトラウス作曲 Perpetuum mobile (常動曲) をかけた。曲の最後でオーケストラが次第に小さくなっていきやがて無音になり、演奏者が "und so weiter" と宣言する。Zero は驚異的に自然にそのゆっくりとしたオーストリア風の話し方を伝えた。それまでの聞いた何よりも最も際立っていて物憂げだった。比較すると、私がこれまで聴いた Continuum や他のほとんどのターンテーブルは最初のトランジェントを強く出しすぎる。これらのターンテーブルは力づくで音楽を出す。聴いている間ほとんどの部分で無意識レベルでこのようなことが起こっている。言い換えれば、TechDAS の Zero はこれみよがしな派手な音ではなく音楽性に照準を向けている。

これはまた根本的に優れた能力とも言える。例えば Concord レーベルの Don't Forget the Blues というアルバムの "Rocks In My Bed" では、たちまちレイ・ブラウンの威厳あるバス、アル・グレイの物悲しいトロンボーンの音色に魅了された。この曲は 1941 年に Ivie Anderson がデュークエリントンバンドとともに歌った曲だが、ブラウンたちは新しいパワフルなものに変えた。次の You Don't Know Me でもリラックスした気楽さがあり、楽器に深みを与えていた。

結果的に特にブラウンのベースではそうだが、エンドレスにも思えるディケイが、どこからともなく生まれる。前述のウィーンフィルハーモニーのLPについてだが、同じようなことをワルツ曲 **Pizzicato Polka** でも感じた。ストリングスが高音部でプラッキングする一方ダブルベースが低音で鳴り響いている。最高音部の繊細なストリングスと、地底に広がる洞窟のような低音、同時に両方を聴くのは息を呑むほど素晴らしい。

さらに **Zero** のもう一つの優位性を述べておこう。それは驚異的な精密さで繊細な内なるディテイルを表現する能力だ。私が聴いた多くのオーケストラ録音では、ライブコンサートで聴くのと似た（パンデミックのせいで最近はほとんど機会がないが）ストリングセクションの華麗な輝きが聴こえた。ストリングスのきびきびとした音、推進力の感覚、リタルダンド、これら全てが究極の自信をもって伝えられる。最近私は **Decca and London** のLPを何枚も買った。**Zero** は録音に迫真性をもたらす微細な、ほとんど顕微鏡レベルのニュアンスを発掘することにより、これらのレコードに命を吹き込むことができる。私の故郷ピッツバーグの有名な **Jerry's Record** という店で入手した一枚に **London** プレス盤 **George Solti** 指揮イスラエル交響楽団演奏の **La Boutique Fantasque** と **L'Apprenti Sorcier** がある。ダイナミックな楽節での凝結したオーケストラサウンドの印象は消え、瞑想的な音に魅了された。このLPで現れた **Zero** の別の特徴は敏捷さだ。不鮮明さが全くない。そうではなく、時が止まるような感覚を作り出す。**Paul Dukas** の **The Sorcerer's Apprentice** では、グロッケンシュピールの小気味よい音が楽しかった。打ち鳴らすシンバルのスピードもまた心地よい。**Zero** をかけている間ずっと電子的な再生という感覚ではなく、生の呼吸するオーケストラを感じさせてくれた。

同時に、**Zero** はジャズとロックでも本当に優秀さを出せる。スラムに不足は全くない。それでいて全く無理のない不自然さのないサウンドだ。むしろ12気筒の車の逆電力に似ているかもしれない。**Muse** 録音盤 ジャズの名盤 **Kenny Burrell** 演奏の **Pent Up House** では彼のギター演奏の敏捷さ、明瞭さ、実力だけでなく **Zero** が変化に富んだドラム音を鋭敏に表現し分けたことに心を奪われた。音色の素晴らしさで、**Zero** はチャンピオンだ。同様に **Led Zeppelin II** のオリジナル盤の **Whole Lotta Love** では **Zero** はこれまで私が聴いたことのないような不屈で確固たるゴングの音を聞かせた。ある意味地下室の床の下から聞こえてくるかのようだ。本当に並外れている。

Zeroの全体的な素晴らしさは何からくるのだろうか？私の考えでは、Zeroが本当に優れている点はノイズフロアを低下させる点だと思う。一つ一つの音がどこからともなく現れる。事実はマッシブなプッターとプッターの回転の精度が音の桃源郷を作り上げているのだ。また一つには、サウンドステージの幅と奥行きがある。それから、楽器の分離である、四重奏でもオーケストラでもそうだ。次にはダイナミックレンジの広さを挙げられる、Zeroは私が聴いたことのあるどんなターンテーブルのよりもよりソフトに再生でき、一瞬のうちに大音量のクレッシェンドへといたもたやすく高めることもできる。最後におそらく特に、豪華で洗練されたサウンドである。

LPを次々にかけても驚いたことにZeroは決して馬鹿げた行為はしない。常に冷静沈着で揺るぎない。Murray PerahiaとRadu Lupu演奏のモーツァルトの2台のピアノのためのソナタでは、Zeroはアンダンテの第二楽章には透明な明瞭さと卓越した美しさを再生した。このソナタのオペラの性質はおそらく陽気な第三楽章に最も明白に表れる。Zeroは素晴らしい正確さでアタックを再生し、真珠のような弾き合いを美しく表現した。Zeroによって間違いなく得られるのは、音楽的方向、つまり音楽家の解釈の干満である。おそらくEMIレーベル盤の演奏はもっと魅惑的であろう。有名なフランスのチェロ奏者Paul Tortelierによるチャイコフスキー作曲口ココの主題による変奏曲である。Tortelierのチェロの響き、彼のアクロバティックな演奏はどんな無感動なリスナーでも啞然とするのは間違いない。

誤解しないでほしい。私はZeroがこれら全てを独力で実現するといっているのではない。このターンテーブルの力を最大に引き出すためにはカートリッジからフォノステージ、アンプ、スピーカーまで全てのオーディオ機器をそろえる必要がある。しかし、もしそうすれば、思いもよらない素晴らしい体験があるだろう。Zeroの実際の大きさから地面にたたきつけられるような音を期待しているとしたら、それはみかけによらない。そういう音を出すこともできるが、Zeroの最も魅力的な特徴はその崇高なエレガンスである。それは究極のレコード再生を求める人たちにとって魅力的なのは間違いないだろう。実際、Zeroが提供する膨大な音楽的恵みにしては、安い買い物だと言って差し支えないだろう。これは大成功のターンテーブルだ。このZeroを勝ち取る人はだれでもMary Jane WatsonがPeter Parker(スパイダーマンの登場人物たち)に言った言葉が確実に当てはまる。“現実を見なさい、タイガー。貴方は大成功したのよ！”